

日本平和学会会員による IPRA 参加報告

2018年11月24～28日、インド・アーメダバードにて、国際平和研究学会 (International Peace Research Association, IPRA) 大会が開催された。日本平和学会からは、数人の会員が参加したとのことであったが、国際交流委員会からの依頼に応え、うち三人の会員から報告書が寄せられた。多忙な中、報告文書を執筆下さった石井一也会員、室井美稚子会員、米川正子会員に感謝したい。また、委員会としては、今後、2年に1度開催されるIPRA大会への参加を検討する会員が、これらの報告書を参考にされることを期待するところである。

23期委員長、奥本京子

報告その1：石井一也会員（香川大学）

11月24～28日、インド・アーメダバードでIPRAの世界大会が行われた。空港到着時よりハプニングに見舞われた。手持ちの500ルピー札が、数年前に廃貨となっており、学会会場までのタクシー代が支払えなかったのである。新紙幣が発行されたことは聞いていたが、旧紙幣が使えないなど、日本での常識に照らしてみても、考えられないことだった（結局、手持ちのまだ流通している100ルピー札数枚を運転手に手渡し、足りない分を会場の警守に助けをもらうことで、その場を凌いだ）。

会場となったヒンドゥー寺院では、荘厳な雰囲気の中、華やかな開会式典が既に行われていた。ヒンドゥー僧侶が、演説をし、日本のミュージシャンやバグパイプの楽団が平和のための音楽を奏でた。学会の式典としては、きわめて独特の雰囲気であったと思う。

翌日からのコミッションについては、インド到着後に研究報告の時間や場所などが知らされる始末で、しかも、私の名前は、ある部会の座長と別の部会の討論者として記載されていた。事前の相談はいっさい行われておらず、ただただ戸惑うばかりであった。もっとも、自分の部会における他の報告者にかぎらず、プログラムに記載された報告の多くが、事実上キャンセルとなって、座長にしても討論者にしても、さほど事前の準備を求められるものではなかった。こうしたなかで、日本人研究者は、比較的出席率が高く、結果として、彼らの報告を聞くことが多かった。いずれも興味深いものであったと振り返る。

最終日の閉会式典では、インドの人々によるガンディー劇と、日本から来たミュージシャンによる音楽は、いずれも熱のこもったもので、会場からの反応はたいへん好意的なものであった。これにつづくアメリカ人のパフォーマンスも、自然の中から音を抽出するかのようなもので、興味深かった。最後のヨーガ指導者による講話も、心の平和を保つためのアドバースとして示唆に富んでいた。

ガンディーを研究している者にとって、なんといっても重要だったのは、グジャラート・ウィッディヤピット（ガンディーの創設した大学）とガンディー・アーシュラムの訪問である。これらの場所は、何度訪れても心を揺さぶられるものがある。世界中から観光客が訪れ

ていたが、2019年の生誕150年に向けて、ますます世界の注目が集まることと思われた。

もっとも、学会後に訪れたハリジャン・セヴァーク・サングのジャーイェーシュ・バーイー氏は、「ガンディーさんの生誕を祝う式典などもよいが、来年は、一人ひとりが150回ないしは150日、何か小さなこととでよいから、それをする方が、彼は喜ぶのではないか」と言われた。「君も150回ないしは150日、なにかどうかね」というので、私は、「150日、チャルカーを廻す」という誓いを立てた。日本語で黒板にそれを書き、証拠写真を撮られたので、(やや強制力が働いていたようにも思われたが) その誓いを全うしたいと考える。

報告その2：室井美稚子会員（トランセンド研究会）

2018年のIPRAは11月24日から28日までインドのアーメダバードで開催された。2年に一回の今回の参加者は120名で、自分が出席した4年前のイスタンブール大会の約千人という数と比べると格段に少ない。全体会や部会の質は別であるが、その理由は主に2つあるようだ。

- 1) ガルトウンングら創始者たちが得た国連からのファンドが昨年に関わり、実務的な補助だけでなく、発展途上国の参加者の財政支援ができなかった。
- 2) ビザの手続きに問題があり、会議用のビザが間に合わずに参加できなかった人々も少なからずいた。(実務の遅れと発給元の混乱である)

余談であるがインドへのビザの手続きはよく変わるらしく、手続きにも問題がある。IPRAの事務局から注



意喚起されたにも関わらず被害者が出た。それは、サイト上で大使館の正規の手続きと紛らわしいものがサイト上で最上位にあるので、普通なら25ドルでよいものを94ドルも払った人が私を含めて少なからずいた。今後、インドに行かれる人は必ずインド大使館のサイトから入られることをお勧めする。手取り早いアライバ

ル・ビザに関する扱いもよく変わるので要注意である。

全体会のスピーカーに欠席はなかったが、各部会では発表者が予定の半分もないところも出てしまった。高部優子さんと私の共同研究を行ったセッションでは、4組のうちの2組しか発表者は現れなかった。発表準備をしていたのにビザが間に合わなかったとのことであった。また、前日に発表予定がメール配信されたが、実はその前のバージョンが合っていたなど、事務補助を雇うことが出来ない台所事情が各所に響いている感があった。

日本人は伝統芸能のお二人や児玉共同事務局長を含めて、約10人の参加で、交流ができて有益であった。参加費は申し込みの時期と会員・学生か否かによって、OECDからは250～400ユーロ、emerging countriesからは120～250ユーロであった。インドとネパールから

の参加者が多く、間の年に開催される APPRA で見知った顔も多かった。

教育関係のビジネスミーティングで話されたことは、主に 2 点であった。1) かつてジャーナルの投稿費は会費とは別に徴収していたが、今回からは別途徴収は行わない。2) この部の役員選挙に出る人を募り、選挙はメールで行う。役員になれば多くの時間を費やし、特に財政補助が見込まれない今は一層の負担が見込まれる。今までの、労に感謝したい。

個人的なことであるが、高部さんとの発表は練習の成果もあってうまくいったとホッとしている。もう一組のインドの先生方の発表は、インド社会はハーモニーを大切にするという主旨であったが、ジェンダーや貧困問題に鋭い質問が出るなど学びが多かった。ただ、ガンディーの縁の地であるにもかかわらず、ガンディーに関しては日本からの石井一也さんだけであった。

我々のホテルから会場までは 20 分くらいオートリキショーをのって 50 ルピーと日本円にすると 80 円で、オート三輪とはいえいかに人件費が安いかがうかがい知れる。驚くべきはウーバーの普及で何と車に UBER と書いてあるではないか。観光に出かけようとしたら、地元の人が親切に携帯で呼んでくれて快適であった。テクノロジーの波が訪れていることはインドの IT 業界での位置を勘案すればあたりまえであるが、路上に寝ている人々との格差は実に大きい。話は変わるが、食あたりを避けるために出される昼食や夕食のカレーは大変美味しかった。

多彩な宗教の国であるだけあって、大会の行事も私から見るとやや宗教色が強いものもあったがインドを感じられるものであった。また、何人かで訪れたジャイナ教の寺院はヒンズー教のものとも異なり大変に美しく、写真禁止であったことが残念である。イスラム教寺院では、他での観光的な寺院と違って女性は入れない建物があって追い出されたりした。

帰国の途につくべく、アーメダバードからデリーへ飛ぼうとしたら、飛行機が大幅に遅れてデリーから東京への飛行機に乗れなかった。日本ならギリギリ乗れる時間であったが段取りが悪く、一日 1 便しかないのでホテルでまる一日を過ごすことになった。ホテルにたどり着くまでも真夜中に交渉交渉でちががあかず、これもインドの一面であろう。日本での予定が目白押しだった乗り遅れの 3 人はその対応に追われ、帰国後もスケジュールにひびいた。インドに行かれるには予備日を設ける必要があることを痛感したので、ご参考に記しておく。最後はドタバタだったが、会議そのものもガンディーアシュラムも素晴らしかったし、ゆったりと構える練習にもなるので、アーメダバードはお薦めの地である。



(ガンディーがいつも座っていた場所)

報告その3：米川正子会員（立教大学）

今回のアーメダバードにおける IPRA の参加は、2012 年の三重、2014 年のイスタンブールに次いで、3 回目であった。前回 2 回とも Internal Conflicts and Conflict Resolution の部会でコンゴ民主共和国での紛争について発表したが、今回は初めて Ecology, Conflict Risks, Forced Migration & Peace の部会でルワンダ難民の事例を使って難民帰還と平和構築に関する発表をした。それによって、自身の研究へのフィードバックを得ることができ、また新たに人脈が広がったことは有益であった。

部会の参加者と議論して同意したことは、強制移動の問題がこれだけ国際的に注目されているにもかかわらず、難民と移民の受け入れの是非にほとんど注目が集まり、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) の母国帰還の政策の問題や難民・移民の心理的不安に関する研究がまだ不十分であることだ。これは私がこの数年、アフリカ、ヨーロッパと北米在住の 80 名以上のルワンダ難民などに聞き取り調査をして判明したことでもあり、また現在、在バンラデッシュのロヒンギャ難民の意向に反してバングラとミャンマー政府が難民帰還を促進している現状からもわかる。今後、さらに本研究を続ける意義はあると確信できた。

その他、部会の議長が Security guidelines for field research in complex, remote and hazardous places に関する発表をし、いろいろと考えさせられたことがある。

<https://repub.eur.nl/pub/93256>

私も含めて世界の多くの研究者が危険・安全地域において聞き取り調査をしてきたが、それによって研究者自身だけでなく、面会者とその周辺の人々にどのような害もたされたのか。また IT が進み、情報が監視されている社会において、研究者は収集したセンシティブな情報をどのように扱い、またどのように処分すべきか。そして、そもそも「研究者」の社会的役目とは何か。このような問題や疑問は十分に議論・認識されていないようなので、その議長らとともに今後貢献できればと思う。